大学時報

1993. 1

第228号

人間として

青木　生子（日本女子大学学長）

二十一世紀にかけて、私たちがいま模索しているものは、あらゆる面での人間らしさの回復と創出であろう。近年、「人間」を冠せた学部・学科名の新設が目立つ。日本女子大学も人間社会学部・人間生活学研究科（博士課程後期）を増設した。ただし、本学の場合はその淵源を建学の精神にもつ。

本学創設（一九〇一年）の意見を天下に公表するために出版された成瀬仁蔵の『女子教育』（一八九六年刊）には、女子を第一に人間として、第二に婦人として、第三に国民（社会人）として教育することが明言されている。人間尊重、個性に応じた全人教育によって、豊かな深い人間形成を目指す教育理念は、時代を先どりしたものであり、未来にわたる不変の真理というべきものであろう。

●年頭所感

現代の教育の問題——学生の一文から

／西原　春夫（早稲田大学前総長・本連盟会長）

明けましておめでとうございます。

平成五年、一九九三年の年頭に当たり、皆様のご健勝と私大連加盟各大学のご繁栄を心からお祈り申し上げます。

昨年二月、学年末試験の採点をしていたら、次のような答案が出てきました。お気にさわる方もいらっしゃるかもしれませんが、現代の教育のかかえるいろいろな問題が凝縮しているように思われるので、終わりまで読んでみて下さい。答案は、私の出題した課題についてはこれをさておき、と前置きしたうえで、次のように書かれていました。

「私は高校時代に一度先生に激励の言葉をいただき、握手していただいたこともある者です。先生の教え子で、町田市で早稲田塾を経営していらっしゃる○○先生をご存じの事と思います。私はその塾の生徒でした。二年前の受験シーズンに、皆のあこがれ、早稲田の総長が突然私達を励ましにやってきてくれました。以来、私はそれまで早稲田に抱いていたイメージが一八〇度変わりました。先生の笑顔、おおらかな態度が強く私の印象に残りました。私は××大学を希望していたのですが、まさに先生に触発され、早稲田を受けることを決心したのです。

私の通っていた高校は進学校ではなく、早稲田に合格した先輩など、浪人を含めても一人もいませんでした。その上、私は学校でも成績の悪い生徒だったのです。いつもつまらない校則や教師の偏見などに腹を立て、職員会議などで要注意人物としてマークされ、学期が終わる毎に両親が学校に呼び出されていました。しかし私自身は不良や非行少女だったわけではなく、普通の健康的な不良娘、といった感じの生徒だったのですが、教師達は私の思考に対して要注意の札を掲げたのでした。私は日本の高校という枠から

大きくハミ出していたのです。人は平等であるはずなのに、校則を破る生徒をまるで戦前のように厳しく体罰で痛めつけたり、人間扱いせず無視をして、ロボットのようにリモートコントロールできると信じている教師達。私は彼らと暴力や非行行為による闘いではなく、理論でぶつかりました。結局卒業するまで煙たがられていた私ですが、誰も予想できなかった早稲田大学への合格を果たして、私は不良でも馬鹿でもないんだよ、と証明をしたのです。

そんな様々な思いや願いのこもった私の早稲田合格の火付け役になったのが、名門でもなんでもない、ただの町塾の私達に向かって、心から頑張れと励ましてくれた西原先生のあの姿だったのです。私は将来、早稲田の名に恥じないよう必ず何かをなし遂げてやろうと思っています。先生に触発されて入ったこの大学、これからもずっとこの伝統を守っていきたいです」

この物語を私の側から説明しますと、ある晩町田市で卒業生の会が開かれ、そこに出席した折、教え子の一人だった○○先生に会いました。そして帰りがけに自分のやっている塾に寄ってくれと頼まれ、多少躊躇はしたのですが、「早稲田塾」と看板を掲げているのでは、仕方ないと思い、立ち寄ることにしました。行ってみると、夜九時すぎというのに皆が実に一生懸命勉強しているのです。しかもそこには予備校特有の暗さはまったくありませんでした。○○先生が「この方は早稲田の総長だよ」と紹介すると、教室中エエッとか、キャーとか大騒ぎ。私は絶大な拍手に感激して激励の言葉を述べ、近くの生徒と握手をして帰っていったのでした。

私があえてこの一文を紹介したのは、はたしていまの公教育は生徒のかくされた力量を引き出しつくしているのだろうかという、普段からもっていた疑問が、これを契機として一段と強くなったからです。塾だ予備校だと批判する資格が公教育の側にあるのだろうかとさえ思われてきました。

いまの若者は、いろいろ批判はされているけれども、いったんやる気を起こせば普段からでは想像もつかない大きなことをやってのける力をちゃんと持っている。これを引き出せないのは我々教師、というより我々大人の責任ではないか……。この一文を読んで、水を浴びさせられたように我が身をふりかえったのは、きっと私一人ではないと確信いたします。

大学・教員・職員・学生

／山崎　春成（桃山学院大学学長）

戦後の日本で大学改革が大きな問題となった時期は二度あった。最初は六〇年代末の大学紛争の時期であり、二度目はいまである（もう一つ、戦後すぐの教育制度改革の時期を挙げるべきかもしれないが）。

大学紛争の時期、改革の提起者は学生・院生だった。それに突き上げられて教員も反応せざるを得ず、大学改革がところによっては熱っぽく論じられた。しかし、大学のあり方への学生の異議申し立てが大学解体というところまで舞い上がって空中分解してしまうとともに、教員の側の改革論議も立ち消えになった。紛争が大学教職員に与えた衝撃は、様々な程度と形で長く残り続けたが、大学そのものはあまり変わらなかった。

あの時期、なぜ大学紛争が野火のように全国に広がったのか。あれから二十年以上を経て、全く違った文脈からではあれ、大学改革が問題となってきているいま、これは改めて検討されるに値する問題であろう。様々な要因の中でも重要な一つとして、そのときすでに進行中であった大学の大衆化、つまり高度経済成長を背景とした大学進学率の急上昇、それに呼応した大学の急速な量的拡大、それに伴う学生の資質や意識の変化などに対して、戦後の大学改革が制度の表層だけの変更にとどまって、その内実は教育内容においても、管理運営においても、旧態

依然たる保守的体質のままだったという、そのズレが挙げられるであろう。学生は変わっていっているのに、大学は変わらないというズレである。

大学紛争後、大学の大衆化はさらに進み、大衆化した学生の資質や意識は、日本の社会の急速な変化を反映して、さらに変化した。一方、大学は、戦後ずっと続いた量的拡大の時期にいや応なしに終止符を打たざるを得ないという大きな転機を迎えている。そこに、紛争の大嵐に見舞われても、それが一過性のものだったために先送りすることができた大学改革の課題が、違った文脈で改めて浮上することになったのである。

大学紛争の時期に大学改革の最も戦闘的な（あるいはむちゃくちゃな）担い手だった学生は、いまはとみに非政治化し、脱イデオロギーが進んで、大学四年間は受験勉強の重圧から解放されてもっぱら遊び楽しむモラトリアムの時期となっている。彼らの間には、大学教育に対する様々の不満がないわけではない。大ありかもしれない。しかし、それは底流として存在するにとどまっていて、それが大学や教師に対する批判・異議申し立て・改革要求として表出されることはほとんどない。そういう意味では学生は、いま、大学改革のアクターとしては、全く後景に退いている。

いま大学改革の主導者となっている、あるいは主導者たらざるを得ないのは、大学、もっと限定して端的に言えば、大学の運営の責任を負っている理事者・管理者層である。大学紛争の時期とはまさに様変わりである。

この層が大学改革を課題として取り組まなければならなくなっているのは、一つには大学本来の使命である教育・研究を現状のままに放置してはおけないという社会的要請と、教育・研究の責任者としての自主的判断との両方からきている。しかし、もう一つ、特に私学においては、経営の観点が大学改革への極めて重要な駆動力となっていることも否定しがたい事実である。

大学が提供する教育サービスの買い手・顧客である学生の供給源としての十八歳人口が持続的に減少するという、経営体としての大学にとっての市場条件の根本的変化に、大学は直面している。いわば大学は、成長産業から一転して、構造不況産業と化しつつあるわけだ。そういう大きな変化が差し迫っていることが、教育サービスの買い手・消費者としての学生という、かつては異端的だった学生観を広めることにもなってきた。そこから大学は「教育をし

てやる」というような権威主義的な姿勢を改めて、買い手・顧客のニーズへの対応を考えて、その教育サービスの内容や技術の改善、イノベーションに努めなければならないという議論も強まってくる。

そういう意味では、受動化して改革のアクターたる位置から引き下がったかにみえる学生が、実は陰の主役として大学改革を方向づけているともいえるであろう。

しかし、いまの学生をいったいどういう特性の社会集団として理解するのか、彼らの自分自身に対する位置づけはどうなのか、彼らの大学に対する期待・欲求はどうなのか、といった点になると、教員の側にもあまり突っ込んだ認識はないように思われる。大量化した学生は、大学への進学率が三パーセント程度だった戦前の時期の学生に比べれば、当然に極めて多様であって、それを概括的に論ずるのは難しい。

かつて私が学生であったころ、河合栄治郎編の『学生と教養』『学生と読書』など、「学生と……」というタイトルのシリーズ（「学生叢書」）があって、学生に広く読まれた。軍国主義の風圧が日増しに強まるそのころだったからこそ、戦闘的リベラリスト河合が学生に熱い期待をかけて、学生に向けたこの「教養のすすめ」のシリーズを編んだり、『学生に与う』という警世の書を世に問うたりしたのだろうが、それはもう遠い昔の話である。いまは学生向け教養シリーズのようなものは全くお呼びではなくなってしまった。当時の学生に人気のあった哲学者三木清が『現代学生論』を書いたのもそのころのことだが、風俗論的現代学生論はともかく、三木のような一つの知識人論としての学生論のような切り口は、いまではとても成り立たない。学生の変容が進んでいるいま、掘り下げた現代学生論が欲しいところだが、それはなかなかに望みがたいことであろう。

他方で大学の教員も、大学の大量化に伴って大量化・多様化している。学生・教員両方の大量化・多様化によって、大学における教員・学生関係も変わらざるを得ない。

大学紛争の時期に塾を見直そうという動きが（小さなものではあったが）あったことを思い出す。塾といってもいまの進学塾ではない。幕末の私塾、そこにおける卓越した師と少数の弟子との間の全人格的な触れ合いのもとに成り立つ濃密な師弟関係を、いまに生かしたいというのである。それは大衆化が進行し、索漠たるものとなっている教員・学生関係への反省として意味はあったと思う。しかし、しょせ

ん、昔をいまになすよしもがなであって、私塾的な教師・学生関係を高等教育の原点として評価することは有意義であっても、それをいまの大規模化し大衆化した大学に生かすことは不可能に近い。時は流れ去って、取り戻すことはできない。温古は知新のためのものでなければならない。

しかし、いまの教員と学生の間の教育的関係の溝を埋める責任は、教員の側にあることは明らかである。学生の質の低下をいくらグチっても、なんの役にも立たない。ところが大学の教員はそれぞれが一国一城の主の趣があり、それぞれの学問観・教育論・大学論をもって容易には譲らないから、「大学冬の時代」がしきりといわれる状況を、その意識の片隅においてでも受け止めていない教員は少なかろうが、教員集団が、例えば学生＝消費者主権論的な大学論で足並みがそろい、教育サービスの向上・改善に精を出すというようなことは、なかなか難しい。教員の意識改革の必要が繰り返し語られ続けるという現状が、それを証明している。

大学紛争という非常事態のときでさえも、大学という組織がおよそ危機管理などということは縁遠いシステムだったこともあって、教師集団の足並みはなかなかそろわなかった。まして、いまはまだ、忍び寄る危機の段階である。しかし、突発的な危機ではないだけに、少ないけれども時間はまだある。その時間をいかに有効に使って、それぞれの大学の志す改革の方向に教員集団をまとめ、動かしてゆけるか。それが大学の浮沈を決するであろう。

最後に。大学は教師と学生だけで成り立つものではない。大学が学生に教育そのほかのサービスを良質のものとして提供するためにも、大規模化した大学の管理運営を適切に行ってゆくためにも、職員の働きが不可欠である。それは、特に私学についていえることであろう。

大学紛争の時期はまた、大学における職員の位置づけについて、教員と職員の関係について、これまで隠されていた問題が、紛争に触発されて浮かび出てきた時期でもあった（少なくもいくつかの大学においては）。しかしそれも、うやむやのうちに持ち越されているようである。多難な将来に向かって大学の改革を構想する場合に、これらの持ち越しになっている問題をどのように明確化してゆくか。また、大学の教育や管理運営について教員に勝るとも劣らない識見をもつ職員をどのようにして育成してゆくか。それは、極めて重大な課題といわねばなるまい。